わたしのまちの消防団

東町中二年　永野皓市郎

僕が「消防団」という名前を知ったのは、去年の夏休みだった。僕はこれまで、北九州や福岡、それに熊本の市内の住宅地での生活しか知らなかった。だからもしれないが、「消防団」と聞いても、どのようなものなのか詳しく知る機会がなかった。

去年の夏休み、祖父母の家に遊びに行った時だった。みんなで楽しく夕食をとっていた祖父は、火事の連絡が入ると、夕食の途中だったが、厳しい表情に変わり家を出ていこうと準備を始めた。そして長靴をはいて急いで家を出て行った。

その時、僕は母から、祖父はその地区の消防団の班長で、近所で火災が発生したと連絡が入ったことを教えてもらった。それから、そう時間が経たないうちに、大きなサイレンを鳴らした救急車の消防車が、家の前の狭い道を走り抜けて行った。

それまで、楽しく夕食をとっていた祖父は、

防団員であること、そして消防団とはという集団なのか教えてもらった。

消火を終えて消防車も帰ってしまったが、祖父はなかなか家に帰ってこなかった。夜も遅くなって、妹や弟はもう寝てしまったが、僕は祖父の帰りを待つことにした。祖父とういう状況だったが、話を聞きたかったからだ。それから、かなりの時間が経って、祖父は帰ってきた。疲れていた。消火が終わった後片付けを手伝ったり、被害にあった人の相談にのってきてくれた安心感と、祖父を誇らしいと思う気持ちでいっぱいだった。

僕は、無事に帰ってきた祖父についていちゃん、お疲れしという声をかけた。無事に帰ってきたことに、ほっとする自分の想像をはるかに超える状況であり、テレビで頻繁に報道されていた東北地方の大地震では、広い範囲でたくさんの人たちが被災し、その状況はテレビで頻繁に報道されていた。

今年三月十一日に発生した東北地方の大地震では、広い範囲でたくさんの人たちが被災し、その状況はテレビで頻繁に報道されていた。

る。そんな中、自衛隊員や消防隊員、警察官と協力して、被害の復旧作業など被災地のために活動する消防団の姿があった。なかには自分自身の家が津波で流された団員、家族が行方不明のままの団員など、自分もつらい状況であるはずなのに、地元の復興のために活動している消防団員もいた。また、悲しいことだが、津波が襲った時、自分も危険であるのに、住民の避難の手助や誘導などに力を尽くし、活動中に自らの命を落とした消防団員も少なくないとのことである。

火災や大震災など、様々な状況があるが、消防団とは地域のみんなで協力して乗り越えていこうという気持ちから成り立っているものである。この組織をこれからも残していかなければならないと強く思った。